



予測警察システムの概要紹介

1500 文字版

目次

予測警察システム①～⑬記事概要まとめ(1500 文字版)	4
予測警察システム①：考えただけで送信が阻止され、AI に調教・支配される時代の到来（未完成版）	4
予測警察システム②：人体ハッキングのメカニズム（未完成版）	6
予測警察システム③：「磁性ナノ粒子」で脳や身体をコントロールする仕組み（未完成版）	7
予測警察システム④：健康被害の仕組みと「簡易対策」――国家テロによる市民迫害（未完成版）	9
予測警察システム⑤：国家テロとイジメは同じ構造――加害組織の「見えない偽装」を読み解く（未完成版）	10
予測警察システム⑥：モニタリングされる恐怖――なぜ「まともな人」が自殺や裏切りに追い込まれるのか（未完成版）	12
予測警察システム⑦：「脳間通信」が生み出す話の通じない「支配者心理」とナノ粒子対策（未完成版）	13
予測警察システム⑧：電場でも人体を操るナノ粒子――完全監視が選挙を成立させなくして極右が支配する未来（未完成版）	14
予測警察システム⑨：一般市民を恐怖に陥れる「ギャングストーキング」は「N3 兵士」の市街地戦？（未完成版）	16
予測警察システム⑩：脳間通信の技術開発の歴史と「加害者と被害者の 2 極化」の仕組み（未完成版） ..	18
予測警察システム⑪：恐るべき見えない加害者との『コミュニケーション』方法――思考監視と身体攻撃が作る支配の構造（未完成版）	19
予測警察システム⑫：なぜ「正しいことをする人」が被害者になるのか？――戦争・テロ・不正選挙を製造する脳間通信ネットワーク（未完成版）	21
予測警察システム⑬：ナノ粒子を利用した「見えない暴力」と、人類を二極化する「トランスヒューマニズム」（未完成版）	23

予測警察システム①～⑬記事概要まとめ(1500 文字版)

予測警察システム①：考えただけで送信が阻止され、AI に調教・支配される時代の到来（未完成版）

中心テーマは、SNS 投稿や通信を「考えただけ」で妨害されるという現象を、監視・AI・通信遮断・心理的調教の複合システムとして読み解くことです。X では、いいねやリツイートが消える、投稿しようとするエラーになる、不都合な投稿でアカウントがロックされるといった被害報告が多数あります。愛子さまに関する投稿でハートが消える例も挙げ、偶然では説明しにくい異変として扱います。

第 1 章では、事実や正しい意見を言うと弾圧される構造を、戦争反対やナフサ不足の指摘への反発、ネトウヨ的集団リンチ、高市政権下でのファシズム・軍国主義化と結びつけます。三笠宮崇仁親王の「偽りを述べる者が愛国者とたたえられ、真実を語る者が売国奴と罵られた」という言葉を引き、現在も同じ価値観の逆転が起きているとみます。

第 2 章では、金の力で事実が歪められる構造を、AV 産業や歴史修正の例で説明します。報酬を得るために権力者や富裕層に媚びる人々が増え、事実を言う人が損をする仕組みがあると整理します。第 3 章では、巨額広告費で戦争や改憲を煽り、弱みを握って同意を偽装する動きに触れます。

第 4 章では、予測警察システムの現象を列挙します。考えて 1 秒以内に Wi-Fi や VPN が切れる、送信ボタンが押せない、メモ帳が落ちる、マウスや画面が固まる、X で高市批判の送信や通知、いいね、リツイート、翻訳が妨害される、腹鳴や異臭、腹痛などが起きるという内容です。人間が因果関係を認識する「時間の壁」を利用し、数百ミリ秒以内に異変を起こすことで、監視されていると感じさせます。

第5章では、仕組みを5層に分けます。脳波検知、エッジ処理、AIによる意図検知、通信の物理的ブロック、学習性無気力による締めです。PalantirやICEの監視システムにも触れ、最終的に送信や告発を締めさせる「調教」が狙いだと整理します。第6章では、PalantirのImmigrationOSやELITEによる移民摘発の予測的執行を例に、監視が「事後対応」から「予測先行」へ変わったと説明します。

第7章では、外部の救急車や暴走バイク、飛行機の音が数百ミリ秒で起きるという矛盾を扱います。音の伝播速度から考えれば、遠くの音源が思考直後に届くのは物理的に難しく、AIが事前に指令を出し、思考を同期の合図として使う構図を提示します。結論として、予測とは名ばかりで、実態は思考と行動を支配するシステムだという見方です。

予測警察システム②：人体ハッキングのメカニズム (未完成版)

中心テーマは、正しいことを言う人や被害を告発する人が弾圧され、身体にも不可解な異変が起きる現象を、人体ハッキングと国家レベルの監視・軍事技術の延長として捉えることです。第8章では、国連のフランチェスカ・アルバネーゼ氏への攻撃、ICC 裁判官への制裁、エプスタイン事件被害者への脅迫や嫌がらせを例に、正しいことを言うと損をする構造が国際的にも作られていると整理します。被害者を「キチガイ」「嘘つき」とレッテル貼りし、住所や居場所を晒し、周囲を攻撃して孤立させる手口を示します。

第9章では、人体ハッキングとして起きる現象を列挙します。虫が襲ってくる、カラスがタイミングよく鳴く、つきまとう人が現れる、運転中に眠くなる、目やにで見えなくなる、視界がぼやける、対向車のライトが眩しい、喉が苦しくなる、咳や吐き気、心拍数上昇、異臭、筋肉の痙攣、腹鳴、屁、腹痛などです。これらが思考や言動とリンクして起きるため、偶然的な体調不良ではなく作弄的な攻撃と感じられる状況を説明します。引っ越しても一時的に減った後に再開するため、逃げ場のない「神の目」のようなシステムだとみます。

第10章では、身体を「意識的な意思で動く部分」「自動で動く部分」「混合型」に分けます。腕や筋肉は意識で動かしますが、消化や自律神経は自動です。訴訟文書を書いている最中に腹痛や下痢が起きる場合、意識的な作業に、外部から操作された自動システムの反応が割り込むことで妨害が成立するという整理です。

第11章では、脳の制御部位と外部操作の可能性を扱います。磁性ナノ粒子や磁気電気ナノ粒子を使い、外部磁場を局所的な電場に変換して脳深部の神経活動を制御・記録できる可能性があるとしています。磁場を使うため遮断や防御が難しいという点を強調します。

第12章では、2026年1月3日の米軍によるベネズエラ侵攻と、32名のキューバ軍事要員の死亡を取り上げます。米軍側に人的損害がほとんどない非対称な死傷比率を、ゴースト・マーマーと呼ばれる遠隔探知・AI位置特定システムと結びつけます。予測警察システムが個人の送信阻止から国家レベルの標的排除へ拡大した可能性を示し、監視・AI分析・精密位置特定・事前行動が同じ技術基盤にあると整理します。

予測警察システム③：「磁性ナノ粒子」で脳や身体をコントロールする仕組み（未完成版）

中心テーマは、諜報機関が人間の支配・コントロールを追求してきた歴史と、磁性ナノ粒子によって脳や身体を外部から操作する技術の現実味です。第13章では、CIAのMKウルトラ計画、731部隊、エプスタイン・ファイルを挙げ、人体実験やマインドコントロールへの関心が続いてきたと整理します。1977年と2026年の公聴会、文書破棄や墨消しの問題も示します。

第14章では、韓国のIBSと延世大学が2024年に発表したNANO-Mindを取り上げます。磁化ナノ粒子と磁場でマウスの特定脳領域を遠隔操作し、食欲を増減させたり、母性行動を引き起こしたりできる技術です。頭蓋骨に穴を開けず、完全ワイヤレスで操作できる点を、従来の光遺伝学との違いとして説明します。

第15章では、この技術が独裁政権に渡った場合の危険性を扱います。磁化ナノ粒子が食品やワクチンなどに含まれる可能性があり、一般市民が気づかないまま遠隔操作の基盤が作られうるという警告です。倫理ガイドラインの必要性、池上彰番組で紹介されたターミネーター兵士計画、脳への直接刺激によるハッキング、記憶のデータ化、サイボーグ兵士構想にも触れます。

第16章では、磁性ナノ粒子で脳信号を読み取る可能性を説明します。磁気電気ナノ粒子が外部磁場を局所電場に変換し、ニューロンを刺激できる一方、ニューロン活動を磁気信号として検出できるため、双方向BCIの基盤になり得ます。MPIによる磁性ナノ粒子の常時監視、脳血流や活動のマッピングも可能になるとします。恐怖を司る扁桃体の抑制、快感と戦闘行動のリンク、前頭前野の抑制、反逆兆候の監視を組み合わせれば、命令に従順な兵士を作れるという危険性を示します。

第17章では、ギャングストーキング被害者が訴える磁場や磁束密度の異常、TMSで指や腕が痙攣する現象、スマートハウスで電流や磁場を制御できる可能性、デジタルツインによるシミュレーションを扱います。磁場は原因に気づきにくいと、被害者が異常を訴えても証明しにくいという点を強調します。

第 18 章では、磁性ナノ粒子で腹鳴、下痢、異臭、心拍数上昇、喉の苦しさを引き起こす具体的な経路を説明します。迷走神経、腸神経系、嗅神経、心臓の自律神経、呼吸中枢への刺激です。第 19 章では、昆虫や動物の行動制御にも触れ、ハエ、蜂、蛾、犬や猫、カラスなどを遠隔操作された兵器に変えうる可能性を示します。

第 20 章では、なぜ「考えただけで数 100 ミリ秒以内」に外部異変が起きるのかを、AI が事前に指令を出し、思考を同期の合図として使う構図で説明します。人間だけでは膨大な監視とミリ秒同期は不可能であり、AI と人間のハイブリッド運用が前提になります。ポケモン GO のような位置情報ゲームと報酬で周囲の人を動かす社会工学のハッキングにも触れ、周囲の奇妙な行動がアプリのミッションで作られうるとします。第 21 章では、これらの技術が虐殺や不正を平気で行える支配者の基盤になっていると総括します。

予測警察システム④：健康被害の仕組みと「簡易対策」――国家テロによる市民迫害（未完成版）

中心テーマは、磁性ナノ粒子によって引き起こされうる 10 種類の健康被害のメカニズムと、日常生活でできる簡易対策です。第 22 章では、腰痛、関節痛、視界不良、筋肉痙攣、皮膚の痒み、心臓発作、脳出血、便秘、睡眠障害、大腸癌を取り上げます。腰痛は脊髄や延髄、視床下部が関与し、痛みの信号の増幅や痛みを抑えるブレーキの妨害で起きるという整理です。関節痛は TRPV1 センサーや免疫細胞、軟骨細胞への介入、視界不良は網膜や視覚野への刺激、筋肉痙攣はカルシウムチャネルへの機械的刺激で説明します。

皮膚の痒みはマスト細胞からのヒスタミン放出、心臓発作は CaV1.2 カルシウムチャネルや自律神経節叢への影響、脳出血は血液脳関門の緩みや血管壁の脆弱化、便秘は腸の蠕動運動抑制、睡眠障害はオレキシン神経や睡眠・覚醒中枢への蓄積、大腸癌は活性酸素種による DNA 損傷と慢性炎症で説明します。これらを「混合型」「随意主」「不随意主」に分類し、意識と自動の境界を突く攻撃だと整理します。

第 23 章では放射線対策として鉛の遮蔽効果と防護服を扱います。第 24 章ではマイクロ波の熱作用、アクティブ・ディナイル・システムによる皮膚表面の痛み、電子機器への影響、水がマイクロ波を吸収する性質を説明します。

第 25 章では、車の運転中に急に眠くなる攻撃への対策として、停車、水を含んだタオルを首に巻く、冷却ジェルパッド、首を 45 度傾ける、充電電池を袋に入れて首の後ろにつける方法を紹介します。いずれも対処療法であり、根本解決には磁場遮断が必要だとします。

第 26 章では、政府が国民を傷つけるシステムとして、南米の「死の部隊」「汚い戦争」「キャラバン・オブ・デス」を取り上げます。アルゼンチンの国家テロ、チリの死のキャラバン、失踪という仕組みを説明し、国家が関与しながら非公式を装う構造が、ギャングストーキングやファシズムと共通すると整理します。

予測警察システム⑤：国家テロとイジメは同じ構造——加害組織の「見えない偽装」を読み解く（未完成版）

中心テーマは、加害組織がなぜ見えないのか、どうやって加害者を増やすのか、国家テロと学校のイジメが同じ構造を持つという見方です。第 27 章では、政府が国民を傷つける国家テロが遠い国の昔話ではなく、加害者が普通の民間人に紛れている点を強調します。

第 28 章では、加害組織が見えない理由として「民間への外注」を挙げます。TIA が議会で止められた直後に Palantir が設立され、CIA の投資部門 In-Q-Tel が唯一の出資者になった経緯を説明します。政府が直接行えば批判される監視業務も、民間企業の契約業務として遂行できる構造です。日本でも、警視総監経験者が顧問を務める警備会社が辺野古の反対派リストを作成していた例を挙げ、警察の監視機能が民間に移植されているとします。

さらに、右翼やカルト、宗教への偽装も扱います。おかしな活動をしていても「熱心な信者」で済むため、追及されにくくなります。日本会議、統一協会、キリスト教福音派、MAGA などを例に、政権中枢への浸透が進んでいるという見方を示します。

第 29 章では、普通の人に加害に加担する理由として報酬システムを説明します。イスラエル政府がガザ住民に人質の位置情報提供へ高額報酬を約束した例、監視ネットワークの懸賞金、兵士がパレスチナ人の写真を撮ることを競わせる「ブルーウルフ」のゲーム化を挙げます。関西生コン事件で右翼活動家が月 70 万円を得ていた例、犯罪者を CIA が手駒にした例、ノリエガ将軍や日本のヤクザとの関係も示します。

第 30 章では、加害組織を「鬼滅の刃」の鬼と同じピラミッド構造として説明します。頂点の無惨に相当する権力者・富裕層・金融エリートが、報酬や承認欲求を餌に末端の加害者を動かします。ナチスの分業、婉曲表現、命令服従、報酬と出世による罪悪感の消去を「悪魔のシステム設計」として整理します。

第 31 章では、国家テロと学校のイジメが同じ構造だとし、イジメの 4 層構造と「組織的ターゲット化の 6 フェーズ」を説明します。選定、監視、ストーキング、信用破壊、攻撃、継続的監視です。第 32 章では、イジメが利益を生む理由を、宿題、カツアゲ、パシリ、性的搾取、身代わり、感情のゴミ箱、集団の結束、優越感、共犯の鎖などの搾取リストで説明します。恐怖による支配と逃げ場のなさが共通構造であり、地域や国家レベルでも同じことが起きていると整理します。

予測警察システム⑥：モニタリングされる恐怖—— なぜ「まともな人」が自殺や裏切りに追い込まれる のか（未完成版）

中心テーマは、ギャングストーキングがなぜ自殺に追い込むのか、特殊な加害手口、思考と感情のモニタリングが生む恐怖です。第 33 章では、普通のイジメとの違いとして、相手の脳や感情をモニタリングできる点を挙げます。怯え、悲しみ、泣き言、怒り、諦めをリアルタイムで把握し、最も苦しむタイミングや弱点をピンポイントで攻撃できるため、自殺に追い込むシステムになりうるとします。耳栓やイヤーマフで音を遮断しても、反応を見て音を大きくするため、逃げられないと感じさせるという説明です。

工事業者や宅配業者などがモニタリングの一部になり、タイミングよく音や訪問を発生させるという見方も示します。突然の虫、無言電話、営業電話も、怯えさせて言いなりにする目的だと整理します。さらに「敵が嫌がるから正しい」という論法を、循環論法であり加害者の論理だと批判します。兵庫県の告発文書問題で公益通報者や追及した元県議が死亡した事例を挙げ、権力者を追及すれば自分が壊されるという見せしめとして機能しているとしています。

第 34 章では、特殊な加害手口を扱います。対向車のライトが眩しい現象を、光源側へのマイクロ波攻撃と受け手側の網膜・視覚野刺激の 2 経路で説明します。ストーリーシアターは、公共の場で偶然を装った芝居を演じ、ターゲットを主観的状况に閉じ込め、正気を組織的に破壊する心理戦です。偽旗作戦は、真犯人を隠し、被害者を無関係な人と争わせるために使われます。エコーチェンバーは、捏造された被害者像を共有・拡散し、被害者を自己嫌悪に陥らせ、真犯人を隠すために機能します。

第 35 章では、思考と感情のモニタリングで起きる 5 つの危険を示します。完全な感情操作、完璧なガスライティング、弱点の完全把握、先回りの支配、拷問の完全な設計です。相手が最も弱っている瞬間を狙って追い打ちをかけ、現実認識を崩し、支援ネットワークを破壊し、反撃を事前に封じ、最も苦しむ方法を正確に選べるようになります。第 36 章では、加害組織が見えない理由を、民間外注、報酬、犯罪者の手駒化、カルト偽装、イジメと同じ 6 フェーズで総括します。被害者は精神疾患や陰謀論者に仕立てられ、孤立させられると整理します。

予測警察システム⑫：なぜ「正しいことをする人」が被害者になるのか？――戦争・テロ・不正選挙を製造する脳間通信ネットワーク（未完成版）

中心テーマは、なぜ正しいことをする人が被害者になるのか、そして脳間通信ネットワークが戦争、テロ、不正選挙を製造し、ファシズムを拡大するという見方です。第 71 章では、被害者が自分が攻撃される理由を分らないのは、ターゲット選定のプロセスが見えないからだと説明します。組織的ターゲット化の 6 フェーズとして、選定、監視、ストーキング、信用破壊、攻撃、継続的監視を挙げます。

第 72 章では、警察、行政、弁護士、マスコミに訴えても無かったことにされる理由を、脳内ネットワークによる先回りの圧力と説明します。被害者が相談しようと考えた瞬間に思考がモニタリングされ、通信遮断や関係各所への圧力がかかり、告発が握り潰されます。Palantir の技術が大規模監視エコシステムを構築し、憲法で保護された活動に従事する市民やジャーナリストに対して兵器化されているという米国議会での問題提起にも触れます。

第 73 章では、加害組織が日常に溶け込む理由として、カルトと美徳への偽装を挙げます。便器を手で掃除する、早起きを奨励する看板を掲げる、畑仕事をする、教会のベンチに座る、ダイナーでコーヒーを飲むといった普通の日常が、宗教的・保守的集団への帰属を装う偽装になります。日本会議、キリスト教福音派、統一協会などの草の根ネットワークが政治中枢に食い込んでいるという見方を示します。

第 74 章では、脳内通信のエコーチェンバーが通常のエコーチェンバーと違う点を説明します。通常は言語を介するため疑う余地がありますが、脳内通信は思考そのものを共有するため、反論の余地が消えます。歴史修正主義的な言説が共有されると、外部の歴史的証拠や学術的合意が敵のプロパガンダとして処理されます。第 75 章では、リアルタイム監視によって行動の発火前に介入できるため、公益通報をしようとするだけで通信が遮断され、職場やマスコミへの圧力がかけられ、告発が握り潰されると説明します。

第 76 章では、フィールド担当者としてバイク便ライダー、救急隊員、建設作業員が使われる理由を、日常に溶け込み偶然を装えるからだとしています。ターゲットの思考に合わせて暴走バイクの音、救急車のサイレン、工事音を発生させ、耳栓をしても大きな音で干渉し、身体をハッキングして腹痛や吐き気、痙攣を引き起こします。学習性無気力の応用であり、CIA の尋問マニュアル KUBARK にも通じる手法だと整理します。

第 77 章では、普通の市民が加害に加担する理由として、報酬と共犯の鎖を挙げます。「勝ち組になりたければ協力しろ」と勧誘し、一度加担した者を共犯者にして逃れられなくします。イスラエルの高額報酬や監視ネットワークの懸賞金を例に、恐怖による支配と報酬による動機付けの両輪で加害者を生み出す構造を説明します。

第 78 章では、脳間通信がファシズム集団を生む理由を、情報の非対称性、権力の逆説、道徳的免責、閉鎖環境、MAGA のエコーチェンバーで説明します。第 79 章では、脳間通信が証拠を残さずに戦争やテロやデモを起こし、武器を売って儲けるための兵器になると論じます。戦争が利益を生み、利益が戦争を生む軍産複合体の構造、エコーチェンバー集団がおかしな理屈でも拡散して味方する点、裏切り者への見せしめ、首謀者に捜査のメスが入らない多層的防火壁を説明します。

第 80 章では、正しいことをする人がブラックリストに載せられ、正義と悪が逆転すると説明します。エプスタイン事件の被害者が「嘘つき」「売春婦」と呼ばれ、脅迫や嫌がらせを受けた例を挙げます。第 81 章では、国民の 7 割以上が反対しても戦争が止まらない理由を、予測警察システムが反対や抵抗を未然に防ぎ、戦争が利益を生む構造があるからだと整理します。第 82 章では、不正選挙やテロや暴動による政権転覆を扱います。韓国の選挙管理委員会ログでの操作入力、日本の高市陣営による AI 動画を使った世論操作、南米の跨国極右ネットワーク、ICC への制裁、不正が発覚しても再検証ややり直しをしないファシズム政権の特徴を説明します。第 83 章では、知ること、記録すること、議論することが最初の防御になると総括します。

予測警察システム⑬：ナノ粒子を利用した「見えない暴力」と、人類を二極化する「トランスヒューマニズム」（未完成版）

中心テーマは、ナノ粒子を利用した見えない暴力と、優生思想からトランスヒューマニズムへ続く系譜が、人類を二極化し「無用者階級」を生み出すという見方です。第 84 章では、酸化グラフェンと磁性ナノ粒子の違いを説明します。酸化グラフェンは化学プラットフォーム、磁性ナノ粒子は磁場で操作できる物理ツールです。両者を組み合わせた磁性酸化グラフェンは、化学的な結合能力と磁気操作能力を兼ね備えます。体内に入ると肝臓と脾臓に蓄積し、酸化グラフェンは肺への長期的残留が特徴です。MGO は肝臓、脾臓、肺に残存し、組織障害が観察された研究もあります。

第 85 章では、「不可視の暴力」を扱います。ヨハン・ガルトウングの直接的暴力、構造的暴力、文化的暴力の分類を引き、イジメ、差別、村八分、ガスライティング、モラルハラスメント、アルゴリズム差別、監視資本主義を例にします。思考や感情をリアルタイムでモニタリングできれば、相手が最も恐れ、最も悲しむことを正確に把握してピンポイントで攻撃でき、自殺に追い込むシステムになり得ます。

第 86 章では、優生思想と自作自演の「世界の警察ごっこ」や「対テロ戦争」を結びつけます。ISIS のような過激派テロ組織に武器や資金を提供し、中東諸国がイスラエルやアメリカから高価な武器を買う構図を作ることで、対テロ戦争が自作自演になるという見方です。片側に話を聞かない集団を配置すれば対立は永久に続き、選民思想からカルトや過激派が生まれます。

第 87 章では、優生思想の源流をギルガメシュ叙事詩の不死探求、ダンテの「人間を超える」という動詞に遡ります。旧約聖書の「選ばれた民」は血統的優劣ではなく神との契約に伴う義務であり、シオニストの選民思想を異端として戦ってきた正統派ユダヤ教徒もいるという整理です。19 世紀末にゴルトンが優生学を体系化し、20 世紀初頭にアメリカで強制断種法が成立、ロックフェラー財団が資金提供し、ナチスが参考にしました。T4 作戦で約 25 万人の障害者が殺害され、大日本帝国も皇国史観と優生学的言説でアジア侵略と虐殺を正当化しました。虐殺はヘイトスピーチから始まると強調します。

第 88 章では、戦後に優生学がタブー化した後、ジュリアン・ハクスリーがトランスヒューマニズムという言葉を作り、優生学をリブランディングしたと説明します。1980 年代の人体冷凍保存、1990 年代のエクストロピアニズム、2000 年代の NBIC 収束とシンギュラリティ論、イーロン・マスクのニューラリンク、動物実験でのサル死亡、意識・記憶の外部操作の危険性を扱います。電腦化サイボーグ兵士は、優生学が目指した望ましい特性の作成と望ましくない特性の除去を、一個人の脳内で即時に完結させる手段だと整理します。

第 89 章では、H・G・ウェルズの「二つの人類」予言と、ハラリの「無用者階級」論を紹介します。少数のエリートは AI やバイオテクノロジーで能力を拡張した超人類になり、大多数は AI に仕事を奪われ、経済的にも政治的にも不要とされます。Opimas の金融雇用削減予測、トランプ政権のイラン戦争と経済破壊が無用者階級を大量生産するプロセスになっているという見方も示します。

第 90 章では、脳間通信がエコーチェンバーを反論不能にし、ファシズム集団を生む仕組みを総括します。思考そのものが共有されると、外部の事実や証拠は無効化され、罪を認めない集団が生まれます。情報の非対称性が神の目感覚を生み、権力の逆説と道徳的免責が共感を破壊し、閉鎖環境が忠誠と支配を重視する価値観を育てます。正しいことをする人がブラックリストに載せられ、正義と悪が逆転し、戦争が止まらずファシズムが勢力を拡大する構造を説明します。最後に、なぜを問い続けることがこの構造に加担しない第一歩だと整理します。

予測警察システム⑦：「脳間通信」が生み出す話の通じない「支配者心理」とナノ粒子対策（未完成版）

中心テーマは、脳間通信によって相手の思考や感情をモニタリングできると、なぜ交渉せず支配的になるのかという心理メカニズムと、磁性ナノ粒子への対策です。第 37 章では、相手の限界や本気度が見えると不確実性が消え、交渉が不要になり、相手が操作対象に変わることを説明します。降参のタイミングを正確に測れるため、降伏するまで攻撃を続けられます。権力感と万能感、脱人間化、ゼロサム思考、サディズムや支配欲、共感の減少、道徳的免責、自己選抜と閉鎖環境、成功体験のフィードバックループが重なると整理します。

第 38 章では、米軍の脳間通信技術の歴史を扱います。Silent Talk 計画は 2009 年に DARPA が開始し、発声前の神経信号を EEG で読み取り、声に出さずに通信することを目指しました。N3 プログラムは 2018 年に始まり、手術なしで脳と機械の双方向通信を可能にする技術を目指しました。BrainSTORMS の磁電ナノトランスデューサー、MOANA の遺伝子治療と光、磁性ナノ粒子への書き込み、視覚情報の共有、兵士が思考でドローンやロボットを操作する構想を説明します。NHK クローズアップ現代で紹介されたことにも触れます。

第 39 章では、磁性ナノ粒子システムへの対抗策を層別に示します。吸入を減らす N95 マスク、空気清浄機、鼻腔洗浄。磁場と電子デバイスの影響を減らす「3 つの 60 原則」、イヤホンやスマホの清掃、睡眠時のデバイス管理、磁性ナノ粒子や銀ナノ粒子を含む防護繊維。体内に入った粒子の排出を促す食物繊維、水分、運動、血液浄化。神経保護と抗酸化のためのメラトニン、オメガ 3、ビタミン C・E、ポリフェノール、クルクミン、リナロール。日常の磁場源を避け、寝室環境を整え、症状を記録する方法です。

第 40 章では、情報の非対称性が神の目感覚を生み、予測優位が相手を操作対象に変え、共感の不使用が脱人間化を進め、道徳的免責が罪悪感を消し、自己選抜と閉鎖環境が支配者気質を育てると総括します。このメカニズムがイジメから国際紛争まで同じ心理的基盤を持ち、脳間通信技術が支配を効率化し、ためらわせなくする装置として機能するという見方です。

予測警察システム⑧：電場でも人体を操るナノ粒子――完全監視が選挙を成立させなくして極右が支配する未来（未完成版）

中心テーマは、磁性ナノ粒子だけでなく電場でも人体を操作できる可能性と、完全監視が選挙や民主主義を成立させなくするという未来予測です。第41章から第43章では、ブログ公開後の異変として、簡易ファラデーゲージ内で電場ゼロ・磁場ゼロにしても、2V/mの電場が生じて腹鳴攻撃が始まったとします。逃げられないことを強調し、告発者潰しや隠蔽プログラムとしての性格を指摘します。モニタリングによって被害者の反応をコントロールし、誤誘導して真相に辿り着けなくする仕組みだと整理します。

第44章では、電場で動くナノ粒子として圧電性ナノ粒子と電場応答性ナノ粒子を説明します。圧電性ナノ粒子は超音波で電気パルスを発生し、迷走神経を刺激して腸の蠕動運動を亢進させます。電場応答性ナノ粒子は外部電場に直接反応し、腸壁の神経や平滑筋を刺激します。磁性ナノ粒子とは操作に使うエネルギーが違うだけで、最終的に腸の動きを人工的に変えて腹鳴を起こす点は似ています。

第45章では、2V/mは迷走神経を介した反射のスイッチ、148V/mは平滑筋やナノ粒子を直接動かす強い電場として説明します。2V/mでは迷走神経感覚線維から脳幹の孤束核、副交感神経反射を経て腸の蠕動運動が亢進します。148V/mではカルシウムチャネルが開いて平滑筋が収縮し、ナノ粒子を介してより低い電場でも筋肉を動かせるという整理です。

第46章では、外出妨害の時期に水を含んだスポンジを腰に巻いて痛みを和らげた経験、スポンジに粉末のようなものが大量発生した事例を紹介します。第47章では、N3兵士が敵の脳活動をモニタリングし、殺意や攻撃意思、次の動きを先読みできるため、未来予知に近い戦い方ができると説明します。複数の兵士が思考を共有すれば、無線も命令も不要で完璧な連携が可能になり、通常の軍隊相手に一方的な虐殺ができるとします。

第48章では、完全モニタリング下では通常選挙が成立しないと論じます。監視側が有権者の思考、感情、迷い、投票意欲、棄権の芽を行動前に把握できるため、野党の奇襲や政策発

表、街頭演説、緊急記者会見を先回りして潰せます。Palantir の Gotham のようなシステム、エコーチェンバーによる捏造された野党像の拡散、投票意欲の管理、SNS そのものが監視の道具になっている点、マスクが選挙結果を事前に知っていたという暴露を挙げます。第 49 章では、電場でコントロールできるナノ粒子の仕組みを総括し、知ることと記録することが最初の抵抗になると整理します。

予測警察システム⑨：一般市民を恐怖に陥れる「ギャングストーキング」は「N3 兵士」の市街地戦？ (未完成版)

中心テーマは、一般市民を恐怖に陥れるギャングストーキングが、N3 兵士による市街地戦や治安ビジネスのような構造を持つのではないかという見方です。第 50 章では、加害側が電場、磁場、超音波、光など複数の操作チャンネルを持ち、状況に応じて組み合わせている可能性を指摘します。第 51 章では、N3 兵士が相手の運動準備電位、情動パターン、注意の向き、自律神経の揺らぎを読み取り、数百ミリ秒から数秒先の行動を確率的に予測できると説明します。

第 52 章では、日常空間での具体的な手口を挙げます。バイクでの追跡・包囲では、ターゲットが曲がろうと意識する前に進路を取ります。護送船団では、前衛車、並走車、後方車、偽装救急車、対向車、上空ドローンが連携し、反撃や逃走の意図を読んで先回りします。救急車のサイレンは、抵抗を考えた瞬間に鳴らすことで威嚇と調教を行い、自主検閲を促します。スーパーやダイソーに急に客が集まる現象は、AI が周辺の人にミッションやポイントを送り、ゲーム感覚で動かしている可能性があるとし、ます。工事音や宅配便のタイミングも、思考や行動をモニタリングして偶然を装う手口として説明します。上空旋回や低空飛行も、生活を監視されていると意識させる威圧です。

第 53 章では、弾圧が反発を生み、反発が予算を生む構造を扱います。パレスチナでの顔認証、監視カメラ、家宅搜索、召喚は、監視されている感覚そのものを日常に組み込み、心理的テロリズムとして機能します。弾圧は反発を生み、反発は治安回復やテロ対策の口実になり、戦争や治安の予算を正当化します。日常空間での嫌がらせは見せしめとして機能し、コミュニティ全体を萎縮させます。安全という名の予算が、監視と弾圧を必要とし続ける循環を説明します。

第 54 章では、知らない間に皮膚に切り傷やアザができる現象を、酸化ストレスによる皮膚組織の脆弱化、電場による細胞膜の破壊、無意識の搔破で説明します。電気穿孔法のように強い電場が細胞膜に穴を開け、磁性ナノ粒子の回転や振動が膜を傷つける可能性を示します。第 55 章では、尿や便からナノ粒子を検出する研究レベルの技術として、SQUID バイオサセ

プトメトリー、糞便磁気測定法、磁気粒子分光法を紹介します。家庭用キットはなく、記録を取ることが現実的だとします。

第 56 章では、金属で頭を覆っても電場と磁場では遮蔽の仕組みが違っていると説明します。アルミホイルは電場や高周波にはある程度有効ですが、静磁場は遮断できません。磁場を遮るにはパーマロイやミューメタルのような高透磁率合金が必要で、完全な密閉も難しく、体内に入った粒子そのものを除去するものではないと整理します。

予測警察システム⑩：脳間通信の技術開発の歴史と 「加害者と被害者の 2 極化」の仕組み（未完成版）

中心テーマは、脳間通信が妄想ではなく 80 年以上研究されてきた技術であり、加害者と被害者に使われるナノ粒子の違いが二極化を生むという見方です。第 57 章では、思考が外部に漏れるという体験を統合失調症の被害妄想と決めつけるのは間違いであり、政府や諜報機関が研究してきたと整理します。

第 58 章では、研究史を 4 期に分けます。第 1 期は冷戦時代の MK ウルトラ計画とコップファグ計画です。MK ウルトラは LSD や催眠術、感覚遮断で精神操作を目指し、1977 年の上院公聴会で 80 機関、185 名の研究者、149 のサブプロジェクトが動員されたとされます。コップファグ計画はテレパシーによるスパイ活動と犯罪防止を目的とし、ARD デバイスが開発されましたが失敗に終わったとされます。第 2 期は 2009 年の DARPA Silent Talk 計画で、発声前の神経信号を EEG で読み取り、声に出さずに通信する技術を目指しました。第 3 期は 2018 年からの N3 プログラムと BrainSTORMS で、磁電ナノトランスデューサーを注射し、磁場で脳の標的領域に誘導して双方向通信を実現する構想です。2026 年に N3 は完了と宣言されましたが、詳細は不明です。第 4 期は 2026 年以降のナノ粒子双方向 BCI 研究で、MENPs がサブミリメートル空間分解能とミリ秒時間精度で神経調節と記録を可能にすると予測されます。欧州議会議員の文書公表や DARPA 顧問の発言にも触れます。

第 59 章では、加害組織をピラミッド構造で説明します。第 1 層は CIA、NSA、モサド、公安調査庁などの諜報機関、第 2 層は民間企業や軍幹部の司令塔、第 3 層は実際に監視と攻撃を行う N3 兵士、第 4 層はゲームやポイントで動く傍観型加担者、第 5 層は傍観者、第 6 層は被害者です。

第 60 章では、加害者と被害者に使われるナノ粒子の違いを説明します。加害者同士は磁電ナノトランスデューサーで双方向に通信し、読み取りと書き込みの両方ができます。被害者は酸化鉄磁性ナノ粒子で一方的に刺激され、痛み、痙攣、下痢、心拍数上昇などを引き起こされます。同じ磁性ナノ粒子でも、N3 は情報の正確さ、攻撃は刺激の強さを優先する設計です。N3 の書き込み機能が悪用されれば、悪夢のような映像や人工的な感覚、衝動を送り込むマインドコントロールになり得ます。第 61 章では、通信と攻撃は別の技術ではなく同じ技術の表と裏であり、勝ち組と負け組の二極化社会を支える技術基盤になると総括します。

予測警察システム⑪：恐るべき見えない加害者との『コミュニケーション』方法——思考監視と身体攻撃が作る支配の構造（未完成版）

中心テーマは、加害者の正体が分からないのに、被害者が加害者のメッセージを感じ取ってしまう矛盾した状況が、思考監視と身体攻撃の同期によって成立するという説明です。第62章では、被害者は思考や感情をリアルタイムでモニタリングされ、腹痛、腹鳴、痙攣、動悸などの身体攻撃を受け、夢や思考の操作も受けると整理します。加害者側は複数の兵士の脳が一つのネットワークのように情報を共有し、脳間通信で連携して攻撃できます。

第63章では、加害者の正体が分からない理由をイジメと同じ設計だと説明します。誰が始めたか、誰が指示しているかが見えないまま、周囲の観衆と傍観者によって加害構造そのものが見えなくなります。姿を隠して脅すのは、顔を見せて話せば済むことを避け、被害者が従った後に「自発的に同意した」ように見せかける「同意の偽装」のためです。感情や思考をモニタリングしているからこそ、どの攻撃が最も効果的かを把握しながら執拗に精神攻撃を続けられます。

第64章では、音による攻撃の仕組みを5段階で説明します。MENPsが脳の電気信号を磁気信号に変換し、AIがミリ秒単位でデコードします。N3兵士たちは脳間通信で被害者の思考状態を共有し、AIが飛行機、暴走バイク、救急車などに個別指令を送ります。音の伝播速度を計算し、被害者が特定の思考を持った瞬間に音が届くよう先回りします。思考と音の同期が繰り返されると、脳は「考えたり行動したりすると不快な音が鳴る」と学習し、無意識に思考を止める自主検閲と学習性無気力が起きます。

第65章では、電車やバスで周囲の人間を使った攻撃を説明します。同じ時間帯、同じ車両、同じドアから不規則に乗る、一瞬だけ目を合わせる、視界の端に必ず誰かがいるように配置する、動作をミラーリングする、スマホや咳や名前前で反応する、嫌がらせに怒った瞬間に電車が止まる、数日止めて安心した頃に再開する、といった手口です。これにより疑心暗鬼、人間不信、引きこもりを生み、外部と交流できなくなった被害者にデマや悪評を流して先行信用破壊を進めます。

第 66 章では、身体ハッキングとして腹鳴、下痢、異臭の仕組みを説明します。磁性ナノ粒子で迷走神経や腸神経系、嗅神経を刺激し、蠕動運動や水分分泌、嗅覚を操作します。外出しようとする腰痛、関節痛、下痢、視界不良、眠気などの拷問で引きこもらせます。逃げられない密室や閉鎖空間が重要なのは、性被害やガザの封鎖と同じく、外部に助けを求められない状態を作ってから加害者が本性を現すからです。デジタル技術が送信不能、Wi-Fi 切断、電話不通、SNS ログイン不能という見えない密室を作ります。

第 67 章では、古典的条件付けによって「見えない加害者とのコミュニケーション」が成立すると説明します。特定の思考の直後に腹鳴、通知音、サイレン、通信遮断などの不快な刺激を繰り返すことで、被害者の脳は特定の思考と不快を結びつけます。加害者は言葉を使わずに「お前の考えは全部見ている」「逆らえば痛い目に遭う」「誰にも助けを求められない」「従う以外に道はない」と伝えています。第 68 章では、そう言わないと酷い目に遭うと学習した結果、貧しい庶民なのに増税を支持する、性被害者を批判する、戦争や改憲、徴兵に賛成するといった矛盾した言動が自発的に起きる「自発的に自滅させる」技術だと整理します。

第 69 章では、加害組織のピラミッド構造と表と裏の顔を説明します。表では優等生、善人、真面目な市民を演じ、裏では逃げられないと確信した瞬間に本性を現します。国家レベルで起きると、表向きは民主主義、裏では弾圧というファシズムの二面性になります。バレても話をすり替え、「フェイクニュース」「陰謀論者」「精神が不安定」「反ユダヤ主義」などのレッテルで封殺します。罪悪感を消すために、報酬、分業、匿名性、婉曲表現、システムへの埋没、仲間内の承認が使われます。第 70 章では、安全保障が庶民ではなく支配者の安全を守る言葉になっているとし、脳内通信が加害者には見えないグループチャット、被害者には見えない檻を与えると総括します。知る、記録する、つながることが最初の抵抗です。